

## 21世紀：錯綜する言語ゲーム

東京工業大学 橋爪大三郎

## § 序 —— 20世紀が持ち越す課題

20世紀を代表する国家は、アメリカとソ連であろう。それらはともに、普遍的世界を標榜する「帝国」で、その内部に人種的・文化的多様性をかかえながら、人類社会を分割する二つの原理を示した。この世紀の終りにあたり、その二極構造を脱する道筋が模索されている。

ここで国家とは、政治・経済・文化の重層的で領域的(territorial)な統合体をいう。国家は、普遍的な原理を掲げることができるが、他の国家と併存・対立する自らの特殊な由来(たとえば民族)から十分に自由でありえない。

アメリカはまず、「法共同体」である。そこで効果する価値は、自由である。民族の多様性は、社会の内部に拡散されていて、大きなポテンシャルを持たない。共通法が行為の相互関係を、共通言語(英語)が了解の相互関係を、保証する。

それに対して、ソ連は、知的位階秩序に従う共同体、ないし「教会」が、国家を形成する。この「教会」は、社会に外在し、民族の上に立つ。近年、この国家の普遍性に疑念がはさまれると同時に、「民族問題」が噴出した。ソ連という国家の掲げた普遍性は、決して共同体内部の不平等(民族)を解消する力を持っていなかったのだ。

このように、20世紀は、人類の共同社会を目指すという課題を、21世紀に持ち越している。

ソ連の挫折、社会主義諸国の行き詰まりを、一種の機能不全(「計画の失敗」として説明するのが、通例である。しかしこれを、別な風にのべることもできるのではないかと思う。

## § 1 —— ルールによる社会の記述

言語ゲーム論は、社会を、「言語ゲームの複合」ととらえる。おのおのの言語ゲームは、ルールを内蔵している。それゆえ言語ゲーム論は、社会を、ルールの複合として記述することになる。

これを、単なる客観主義と混同してはいけない。ルールの存在は、ゲームを「理解」することなしに、主張できない。つまり、言語ゲームに内在するのではないと、ルールを客観化することはできない。(再び注意すると、言語ゲームを理解しているからと言って、ル

ールが客観化できるというものでもない。) だが、いったん記述されたルール(の複合)は、客観的なものである。言語ゲーム論は、社会のうちに生きながら、それを客観的につかもうとする場合に、必然的に要請される方法である。

ところで私は、これまで、社会のいくつかの下位領域を、言語ゲーム論によって記述する可能性を探ってきた。すなわち、

- ①宗教の領域については、「仏教の言説戦略」で、
- ②法、および政治システムについては、「言語ゲームと社会理論」で、
- ③経済の領域については、「はじめての構造主義」などにおいて、アイデアをいくつか示した。

そこで主題になっているのは、ルールの相互関係である。社会内部の矛盾・対立は、ルール相互の矛盾・対立として記述されるはずだ。

これまでに用いてきた概念、例えば、慣習的なもの(一次ルール)/作為的なもの(二次ルール)の区別は、矛盾や対立をいみしない。その区別は、実体的なものではなく、ルールのふたつの側面を表すものだからだ。矛盾や対立は、ルール相互の両立可能性/両立不能性(imcompatibleness)、として考察することができる。

言語ゲーム論のために私が用意した分析用具は、つぎのような概念である：

ルール環、複言語ゲーム、部分ゲーム/拡大ゲーム

ルール環とは、規則に随順する(rule-following)身体の集合性のこと。複言語ゲームとは、結合した一次ルール/二次ルールのシステムのこと。部分ゲーム/拡大ゲームとは、包含関係にある二つの言語ゲームの相互関係のこと、であった。これらはいずれも、ルールが互いに矛盾しない場合であることに、注意してほしい。

それに対して、民族や国家は、互いに(潜在的に)矛盾・対立するものとして、記述すべきものである。

## § 2 —— ルールセットの相互関係

ルールがいくつか集まって、社会生活の全体を構成しているときの、ルールの集合。これを、ルールセット(rule set)と言おう。

ある民族なり国家なりとして現に営まれている社会を、(その内部に深刻な矛盾・対立を含まない)ルールセットとして、記述することができる。

ルールセットの相互関係は、単なるルールの場合よりも、取り扱いが格段にむずかしくなると思われる。数多くの言語ゲーム(ルール)が、互いにどのように配置されることができ、全体としてどのような秩序(システム)をなすかは、まだほとんど考えられたことがない。しかもこれは、非常に複雑な問題であろう。

あるまとまりをもった社会（ルールセット）同士が遭遇した場合、どのようなことがおこるか？ —この種の現象は、文化変容(acculturation) などとして問題にされてきた。しかしそれは、一方が他方に影響されるという、特殊な場合に関心を限るもので、この問題を一般的に考察しているわけではない。

この問題を考えるにあたって、たまたま池田清彦著「構造主義と進化論」（海鳴社）に、つぎのような考察があるのが目についた：

【さまざまな限定空間〔注＝ここでは例えば、核酸やアミノ酸からなる無機的環境に、その上位構造を付加して出来上がった最初の生物、などが念頭に置かれている〕が定立しているところでは、限定空間同士の衝突もまたまれではないかもしれない。ここでは異なる二つの限定空間が衝突したときの帰結について考えてみよう。

- ①、二つの限定空間は融合せず、本質的な影響を他に与えない。
- ②、二つの限定空間はともに消滅する。これは通常、二つの限定空間が互いに背反する構造（物質と物質の関係性として互いに矛盾する法則）を有しているにもかかわらず、空間が融合した場合に起こると想定されている。
- ③、二つの限定空間は融合して、どちらか一つの限定空間だけになる。これは通常、優位の限定空間が劣位の限定空間をすべて含有し、なおかつそれらの上位構造を有している場合に起こると想定される。
- ④、二つの限定空間は融合して新しい限定空間ができる。これは通常、二つの限定空間が、互いに異なるが背反しない構造を有している場合に起こるだろう。この新しい限定空間は、最初の二つの限定空間より、複雑で高レベルの秩序を有していると考えられる。】(221頁)

しかも池田氏は、論理的に考えて、可能性はこれらに尽きることを強調している。

この考察は興味ぶかい。「限定空間」を、「ルールセット（に従う言語ゲームの複合的なシステム）」と読みかえるなら、われわれの考えようとしている状況とそっくりだ。ここにのべられていることは、一般的に正しいと思われる。

ここにのべられていること以上の帰結を導くには、ルールセットの内部構造、とくにその階層的な関係について、特殊な限定を追加しなければならない。階層的な関係とは、あるルールが、別のルールを前提とすることである。たとえば、法のルールが言語のルールを前提とする、という具合に。

\*

一般的に語りえないのなら、個別に解くしかない。

ヴェーバーの比較社会学を、つぎのように再構成してみよう。それは、宗教を、ルール

の階層的な関係の（相対的な）基層に位置するルールセットとみて、それが、より上位のルール（近代化・合理化）の制約条件になっていると仮説する、という方法である、と。彼は特に、キリスト教、なにかなくプロテスタンティズムを前提にしなければ、資本主義を可能にする行動特性（ルール環）が出現しえない、とした。

== (図1板書) ==

このヴェーバーの指摘は、今日、いくつかの点で修正を迫られている。特に日本の資本主義がこれほど圧倒的に成功したことを、どのように説明するか。ヴェーバーの比較社会学を、比較近代化論とでもよぶべきものに、修正できるかもしれない。この議論は、つぎのような構成をもつ。

== (図2板書) ==

基礎的なルールセットとして、宗教（ないし、固有の伝統社会）を考える点は同じだ。ただし、その上に、横断的に、近代のさまざまな社会形象・制度が横たわっていると想定する。それらは、各国、各社会に分有された、ルールの集合である。これらのルールがどのようにして分けもたれるようになったのかは、いま問わない。とにかく、これらのルールが、各国、各社会の近代である。それが、異なった環境（ルールセット）のもとで、どのようにはたらくか。オリジナルな近代と、その同位体の系列。同位体は、あるルールの前提が別のルールに置き換えられる場合に、生成する。同じ近代的な形象（ルール）が、異なる社会的背景に置かれることによって、設計とは違った挙動を見せはじめる。

\*

ルールセットの内部構造について、もう少し考えよう。

ルールセットの、もっとも基層には、ごく日常の行為が位置する。この層は、（日常）言語によってすみずみまで浸透されていて、日常の行為と言語とは相互形成的である。そしてこの層は、その社会の意識しにくい“規範(norm)”を形成している。

このような規範によって、社会的な個人の身体が形成されている。ルールセットのこの基層の部分（いかなる言語ゲームの二次ルールでもない部分）は、身体の（社会的な）自然環境であるゆえに、それに立脚する二次的な制度にとっても、自然にみえる。

このような意味での、言語や生活慣習が、民族や国家といった、領域的(territorial)なルールセットの土台になっている。ここが手付かずでのこる限り、法や社会制度のような、意識的に構成された二次的な制度がどのような普遍的理念を掲げようとも、国家は特殊でなくなることはできない。

## § 3 —言語の機械処理の、テクノ・インパクト

ルールセットのもっとも基層の部分に、日常生活のルールと、日常言語のルールが位置することをみた。

さて、各言語は、人間の普遍性にもとづく、共通構造をもっている（チョムスキーの指摘）。ゆえに、言語は、互いに翻訳可能（translatable）である。だから人間は、一定の努力をつめば、外国語を第二言語として習得することができる。

言語の通じない人びとが混住することは、困難である。ひとりびとりは、言語を習得すれば、よそのルールセットにもぐりこむことができよう。しかし、外国語を習得するコストは大きい。したがって、人びとは地球の各所に定住し、民族を構成する。三つの生産要素（土地・資本・労働）のうち、労働が移動しないとされるのは、このいみである。

生産要素が移動しなくても、商品が十分に移動すれば、生産要素の価格（地代・利子・労賃）は各国で均等になることが証明されている（ヘクシャー＝オリオン＝サムエルソンの定理）。そうであるとすれば、労働力が移動する動機は生じない。しかしこの結果は、各国の生産関数が同一であることを前提にしていた。各国の固有文化、伝統社会のあり方により、生産効率が異なるとすれば、より高い労賃（生活水準）を求めて、移動の圧力が生じることになる。

言語のちがいは、移動を阻む大きな障害になる。

言語の即時自動翻訳機が実用化すると、この障害は取り除かれる。あらゆる不均等は、大きなビジネス・チャンスになるものだ。人間の言語情報処理に関連する産業は、21世紀の産業の主要部分になるであろう。

即時自動翻訳の技術は、言語にとどまらず、日常生活の「翻訳可能性」にもつながるものである。なぜかと言うと、日常言語の「意味」は、本来、文脈（状況）依存적であるからだ。言語が行使される状況の、さまざまな行為の配置や連関を解読する一般的な手続きが設計できてはじめて、この技術は実用になる。日常生活の暗黙のルールを書き出すという作業が、必要だ。ここでも言語ゲーム論は、中心的な役割を演ずる。

この技術が、つい実用になるか、いまは何とも言えない。実用に入れば、人類社会は画期的な新段階に移行する。実用になるまでは、競合しあうルールセットを、古典的な手法で調停していくしかないだろう。それは、ルールセット内のルールを適宜に交換して、ルールセットが互いに両立可能となるよう改造していくことである。

## § 4 —日本：〈外〉を共有する文化

20世紀から21世紀にかけて、国家は新たな統合と再編の段階を迎えている。ECの本格始動。アメリカ・カナダ関税ブロックの成立。そして、ソ連、中国（社会主義システム）の解体。国家の再編とは、新たな内/外の設定である。

日本社会は、伝統的な内/外の処方を持っているようである。私はそれを「“Togetherness”の優越」と概念化した。この法則は、単純なルール環とは異なるものである。ルール環は、ルールを共有するところに張られるのだが、「“Togetherness”の優越」は、（明示的に）ルールを共有することを拒否する。それでは、“Together”であること（一種の機会的なあり方）を、規範的にもたらずものとは何だろう。それは、〈外〉だ。何らかの〈外〉を（明示的に）共有することによって、人びとは“Together”でありうる。

日本（伝統）社会を、ルールセットとしてモデル化しようとしても、ルールによって十分に記述できないことを覚悟すべきだ。たしかにこの社会も、ルールの集積ではあるのだが、どのルールも別のルールに、偶発的な仕方置きかわっていく。あるいはそれは、厳密にはルールでない。（その詳細は、「にっぽん：制度なき権力多様体」（「オルガン」3号、1987）を参照のこと。）

\*

日本社会は、微小な局部から全体にいたる、多様な〈内〉と〈外〉の技法でできあがっている。これは、西欧流の「法共同体」との対比で、「天皇共同体」と言うべきものである（「冒険としての社会科学」参照）。法は、可視的な共通形象への服属をいみする。それに対して、日本は、共通の〈外〉をもつことで、己れが何であるかを知るのだ。

さて、〈外〉を共有する、という社会技術は、普遍的なものでありえない。なぜなら、〈外〉で通用しないことを前提にしたルールしか、明示的には持てないからである。そして、ある場所でしか通用しないものは、普遍的なルールではない。この技術は、あたかも「行為の代数学」のクロスのように、いつでもその〈外〉に依存している内側を作りだすのである。

このような理解が正しいとすると、日本社会は、他の社会（ルールセット）一般と、かなり異なる内実をもっていることになる。すくなくともそれは、世界の作法とかなり異なる。日本は、自分たちのルールセットの基層を、他の民族に脅かされたことがない、というかなりナイーブな民族だ。そのナイーブさをよく自覚して、人類の共同社会を模索する努力に、われわれなりの貢献を始めることが、日本社会の21世紀の最大の課題であろう。